花のちらり 其之[illegible]

國 語
4L
97
4

東夷南蛮。北狄世間なら[illegible]。
[illegible]。所語れば作者ばかりて。人情本の
趣向さへ。年々歳々新らしく成。
書肆が需に。作者も画工も。
一[illegible]とはいえども。[illegible]
[illegible]

L:112787
国語

木偶（にんぎやう）までが。世話（せわ）狂言（きやうげん）ゐ西作（ちまさご）るのと。作者（さくしや）も看官（みて）も元気（き）を絶（た）たぬうち。まして草紙（さうし）のいく喜（おんじやう）ばゝあ。勧善（くわんぜん）懲悪（ちやうあく）愛別離苦（あいべつりく）の忠信孝悌（ちうしんかうてい）手。感涙（くわんるい）、きまとる筆（ふで）持支（きやだ）は。い杉く万字（ちやうらい）が好（この）める肝（きも）。日（ひ）ゞに心（こゝろ）をゆづく移らは。三冊（きんきう）

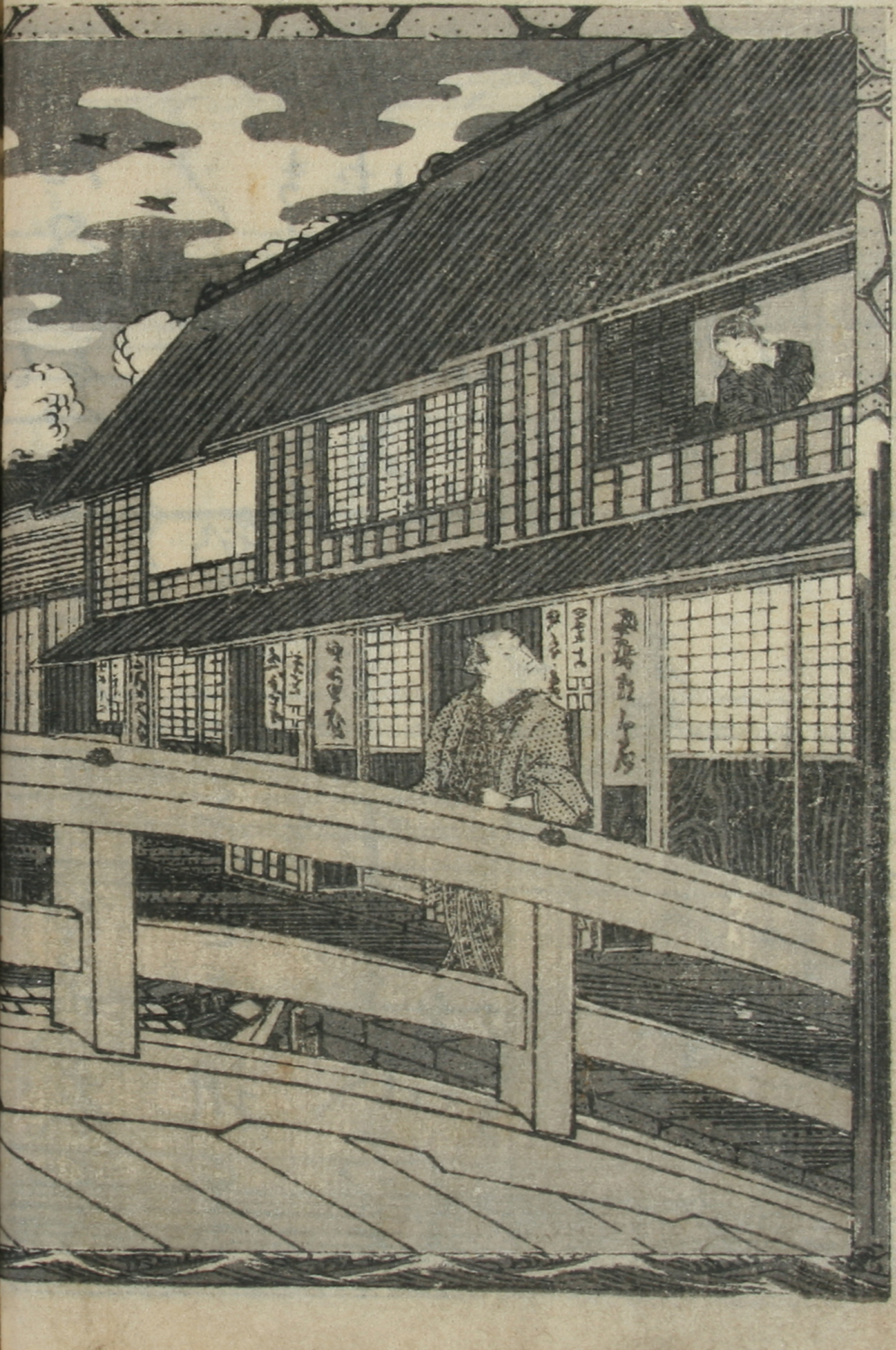
彼も茂(あい)で餘萬(なよ)あり。四編(えん)とありしも
作(こ)興(ひわき)頁の。津はきによりて古拙作(せうさく)話。
韻(まん)き成勝(まて)あふる。冥加(めうが)よは時(うき)ゐるあ
行(ゆく)末(すゑ)の。冨貴(ふうき)自在(おざい)眼(ま)のゆくあと。
随分(ずいぶん)免許(めんきよ)に、おのづからの。あまへ道
たゝかはしげゝめへ。桃園(とうえん)をなゝめ樓(さわろ)ふ

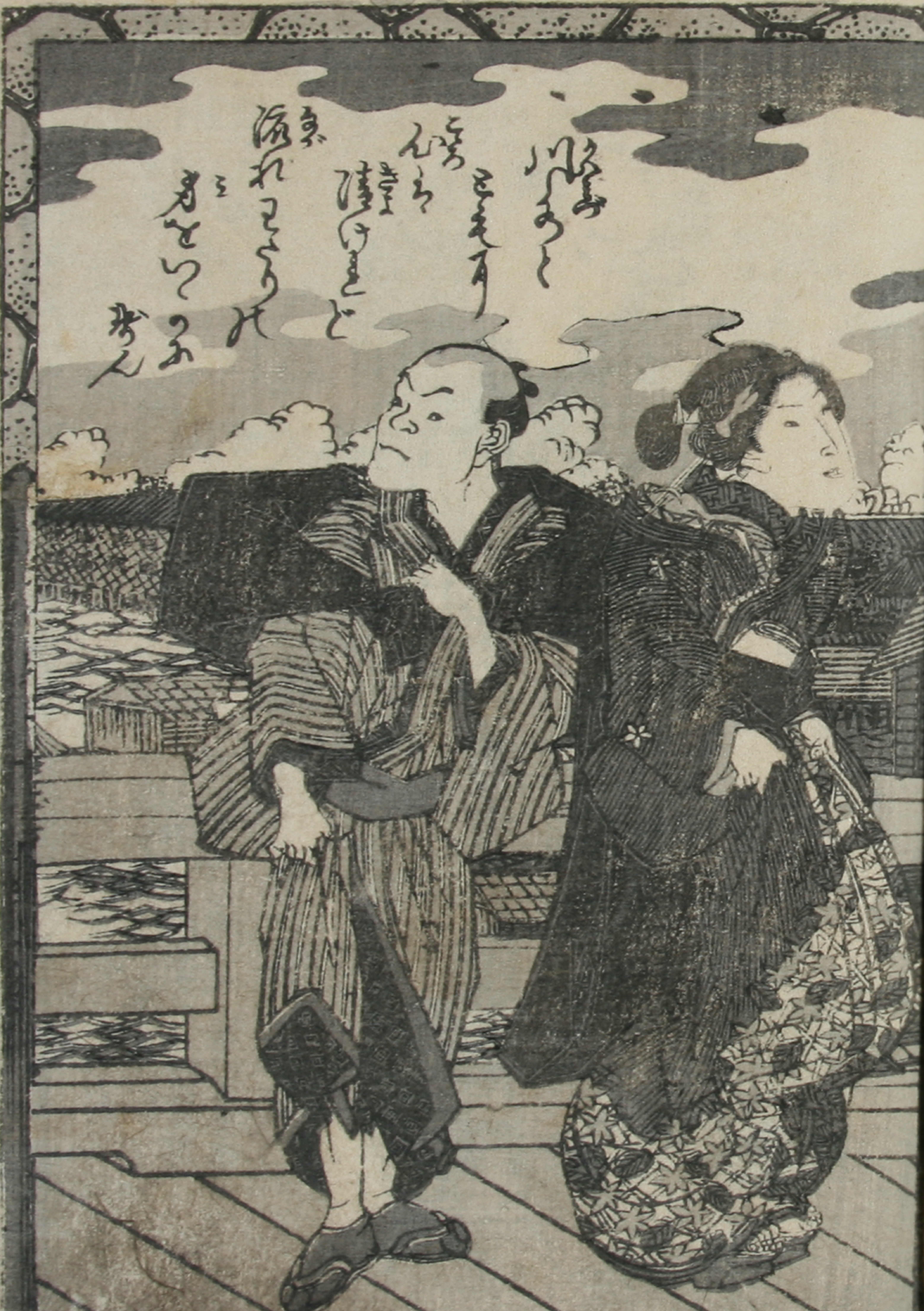
およびし閨ゟ流りかゝる浮れて
さ國へ参るを迎へて手招き源寄。
大きいはしくも願ふ連銀の代りに
きさを行云はれた。なまりがまあ子の富て。
蛇や蛇の道をなのて前月地。神下まに
ほかもちやりの出て見る累筆に木ゝ導。

かれ乃書を袍と倦は、写てみ、喜んだらう
久しくと、千数の咄手をもれども
そのまゝのがをと
其備ま又消し意を盡るは、大道
大江戸乃。花酒遍書卜云。曰

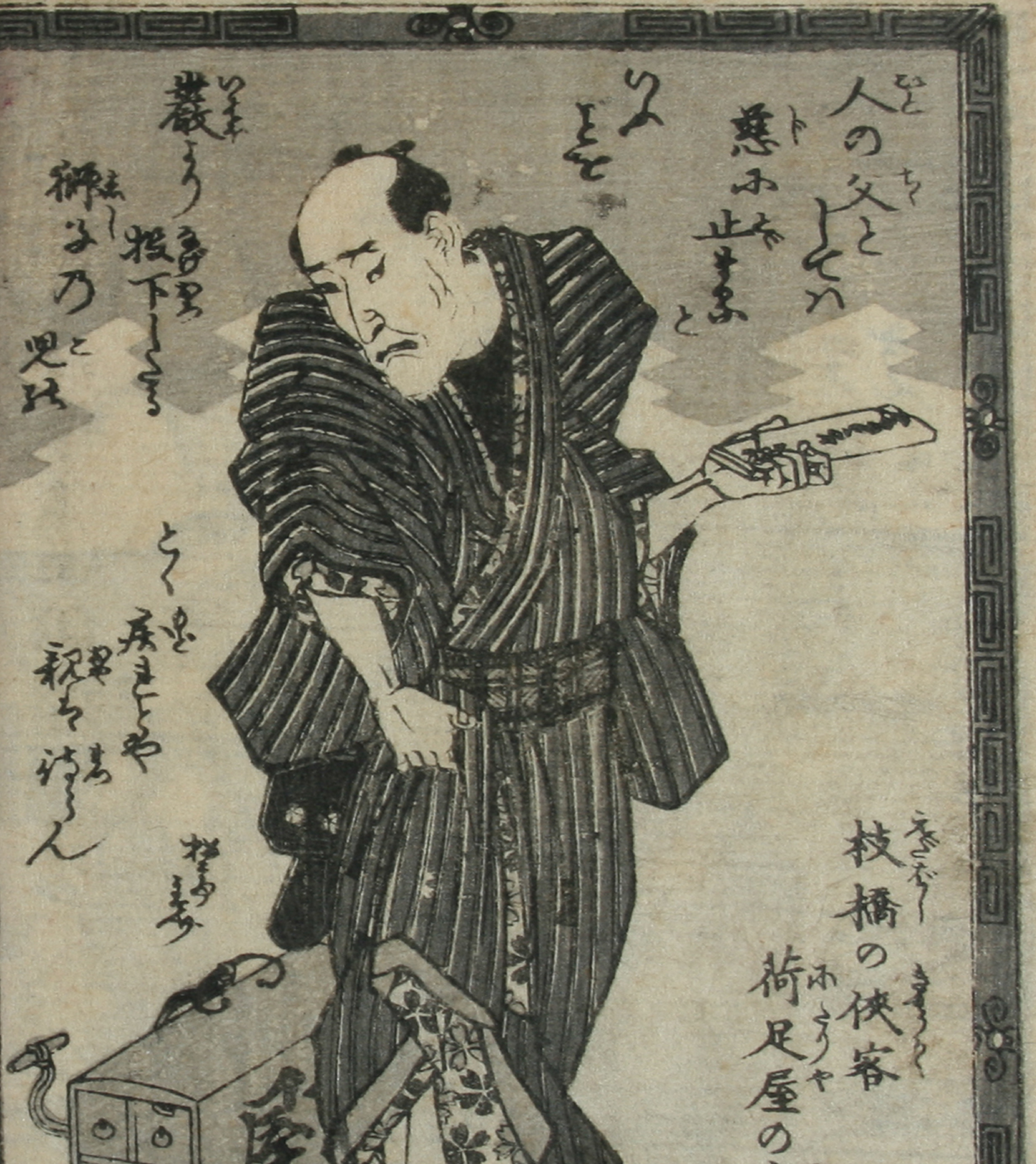
天保九年
戊戌初冬

東都
吉志庵
大福
（吉）





隅川なかく
三毛有
なんら
きま清けれど
来流れてこそれ
三身をいつのみ
考人



人（ひと）の父（ちゝ）とよそハ
悪（ト）ふ止（を）まぬと
りよどそ

叢（のまゝ）より急（いそ）ぎ
枝下しまる
獅子（志し）乃と
見跡

とく忠を
廣（ひろ）まとや
栗（くり）穂（ほ）を
待（まつ）らん

梓多喜

枝橋（えだばし）の侠客（きやうかく）
荷足屋（にたりや）の鬼勝（おにかつ）

比翼連理花廼志満臺第四編巻之上

東都　松亭金水編次

第十九回

「ナイお春さん〳〵ト（よびかけられて／うしろをむき）春「ナヤ誰ぞへ何ぞか嗜らしくあまさうへヨ「へゝ明るくッても見れへ極残住様とゝ云ンざアトいたましくしくづき春「ム源六さんざまう。何所へお出だ源「是からお前の宅へ往のざア。帰がすこし周徳不往よう春「十二ざうしやうの宅へ帰る所じやアあるへ大寝があるへ源「何ざ

大造(たいそう)らしい大変(たいへん)もねへもんだ　吉「面倒(めんどう)だはな、聞(きい)ておくれよ。アノ和くがな、さんざん目(め)に逢(あつ)ては　法「フム何(どん)な目(め)に逢(あつ)たへ、女そう参(まい)りでもさらばこそと思(おも)へが、まるで盲目(めくら)のお釜(かま)をさらへ奴もあるめへし、いやらしい　吉「エヽモウ源六(げんろく)さん笑(こら)ひだひと、じやアありいすが、昨夜(ゆうべ)おまへ河岸(かし)で盗人(どろぼう)に逢(あつ)てさ。胴巻(どうまき)不おらく振ら金ゆゑ、みんな取られて仕舞ふし。其上(そのうへ)に堀(ほり)へ突(つき)落(おと)されて、既(すんで)に死(し)ぬ所(とこ)さ。昨夜(ゆうべ)も四(よっ)つ刻(とき)まへのるずそうだ。今朝(けさ)漸(やうや)くごとまで近所(きんじよ)の人(ひと)が寄つてくれさ。肝(きも)を潰(つぶ)しやく

縫付（ぬひつけ）て縫（ぬ）てかゝらア。夫ゆへ天窓（あたま）が泥（どろ）だらけになつてみろ。むぐむぐとして口（わ）形るだろうサ。夫（それ）から漸（やう）く人（ひと）を救（すく）んさ引揚（ひきあげ）て笑（きい）めてしまうと。突落（つきおと）さるゝと引足（ひきあし）後（うしろ）を上げて。夫（それ）まで咽喉（のど）を働くのができなくなる。夜中（よぢう）その泥（どろ）のなかに寐（ね）なさるとどうサよくマアそれでも死なずに居（た）ると思（おも）ひます。夫（それ）からちくへ連（つれ）て行（ゆ）つて。お医者（いしや）さまに受（うけ）るが。直（ぢき）に元気（げんき）が付（つき）ましよ

経「ヤアそりやア大変（たいへん）。おぼれへるすところさるさまア。盗人（どろぼう）はすぐに知（し）是れへりは

吉「ア結（きつ）さいは志是へけれど。其（そこ）な御（おちや）落（お）て寝（ね）さ

拙が是ぞ。生とハ手足りがあるのサト聞てハ気ハ不なる
身のこゝへ。何も落して地ハあい善と。今更情を操るもおかし
拙しくして湯六ハ気を流め　法「落て張さんド。ぜんな拙ご
吉「ヲヤアきつい急速せうごわへ。道人ハおら不じやアあいら
法「コレく耳にふのらアよして呉れへ。世でも難でも湯六さ夜ごア
まつさう道人ハ仕ねへヨ　吉「アレサ戯談ごアる。惣領様をお立じやア
気のどくごヨ　法「ナニ彼も背も立しねへが。手前自己もおち
ぶ目て湯まゝねへ身にあつたら。戯談にもそんなあるめへ

云すると此方も僻で気にかゝらア　吉「ツイ私しが義理を云さのぐつら。気よ向つゝう嫌君おしといふもんだね。私しやアそれ程じやアあへ。まことに急く用があるから先へ行ますヨ　張「コレサ用があるヱ。用が有もしねへもんぶつて用のねへ人も見めへス

吉「よウく急くなるのをお云ぶねへ。真に今夜は事があるといふ約束で寄合に往なくちやアならねへからサ　張「フムそれぢやア何所へ往のだ。自己も一所に往う　吉「ハイ有がたう。しかし私しぶらり往ますヨ　張「コレサ何所へ往といふのさトて得

兄（おやぢ）の有る身にて。座敷（ざしき）つろくも去（きぐろ）ず袖（きで）紙（し）ひろくろ是（これ）を

引戸（ひきかど）せば〽去「アレサ戯（い）談（あうぜん）間でまへヨ。お前（まへ）八てア継（まゝ）気（き）ぜん

ごれへ。人（ひと）の気（き）もしらるので〽酒「ハテサお前（せん）の心（ところ）をお察（さつ）して

万（ちんど）すめんどらまろうろ細密（くぐ）も吉（き）の不（ね）器（さ）して旅するりもある

めへじやアねへうまく金（かね）儲（ふりかう）くる二おやこあへて不（ぶ）躾（しつけ）

るかごろ利益（ようぞ）もあやせろ〽去「十二五金（かね）銭（か）借るも五。今其く、もる

ごねてア、お礼（うう）長（さん）先へ言（かつ）ますせろ〽酒「コウく夜稼人（きろうぞ）を取る番（ぞう）

みしるなさんか。宿（うそ）ごとるのあろ為（なも）後兄世世るト情の中（ちうとこ）へ（むかう）

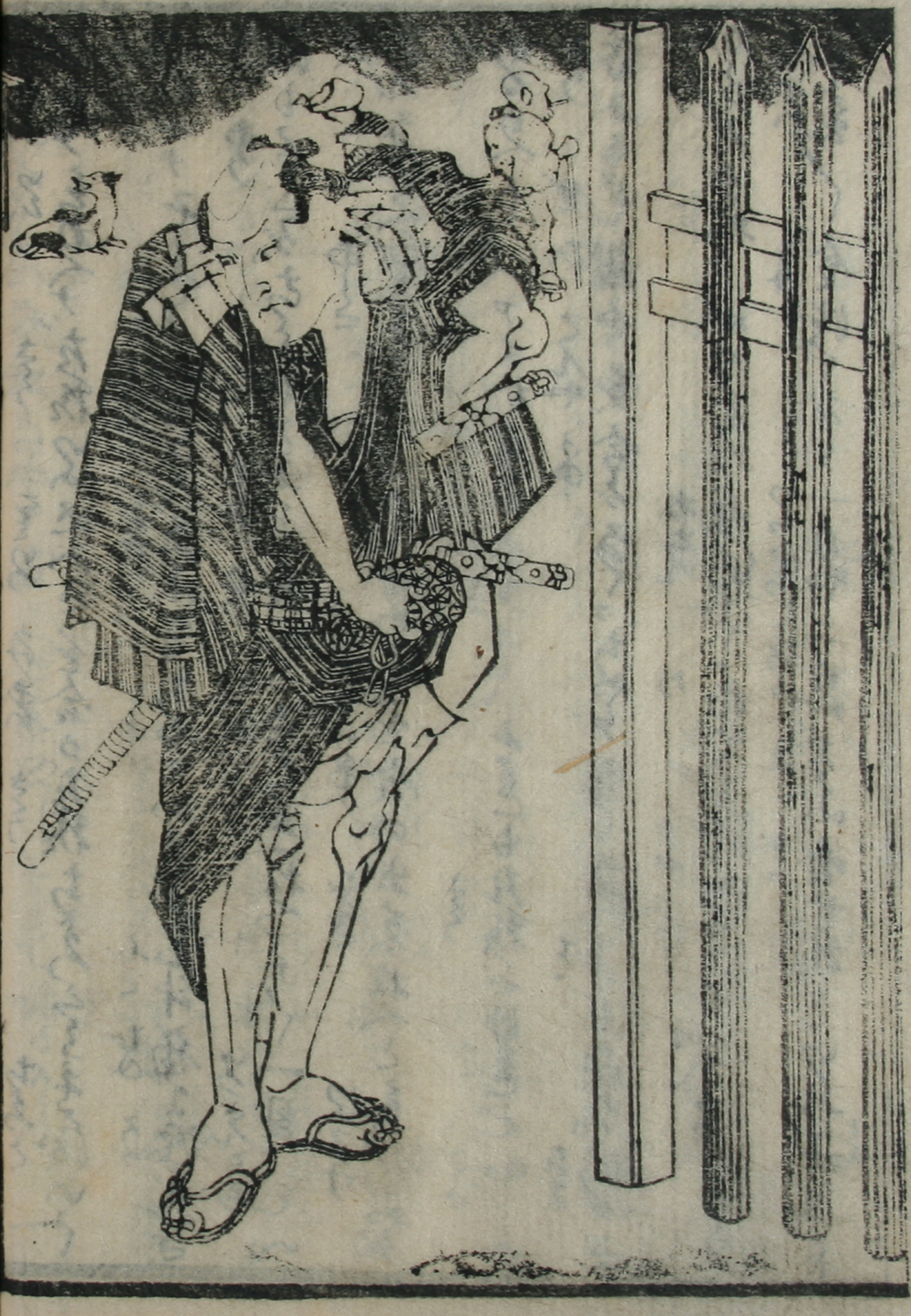
手（て）を入（いれ）て〳〵。チヤラ〳〵と金の音（おと）がさせるがお客（きやく）気（き）付て　客「ヘイヤおまへアノ何（なん）ぞして巾着（きんちやく）に入（いる）金を持（もつ）ておかさんすぞエ　法「コレサ貴様（さま）他（ひと）とえらびするものぢやアねへ。自己（おいら）も男（おとこ）の果（はて）ぢやア。二十や三十の金（かね）ぐらへ。工面（くめん）しやへかのでもねへのス　客「アレサそうじやア貴様（さま）ざけまども。金の持退屈と申を知してから。後（のち）ハ都合（つがふ）がこゝろのくとおいゑごのふ。巾着（きんちやく）に大造（たいそう）金を持（もつ）ておき出（いで）ざうし。貴様（さま）いやのサ。そんなうまくおまへチツト。奇麗（きれい）な気儘（きま）でも様（こなさん）くお気（き）のつかふねへ　法「自己（おれ）も貴様（さま）おめつそへ

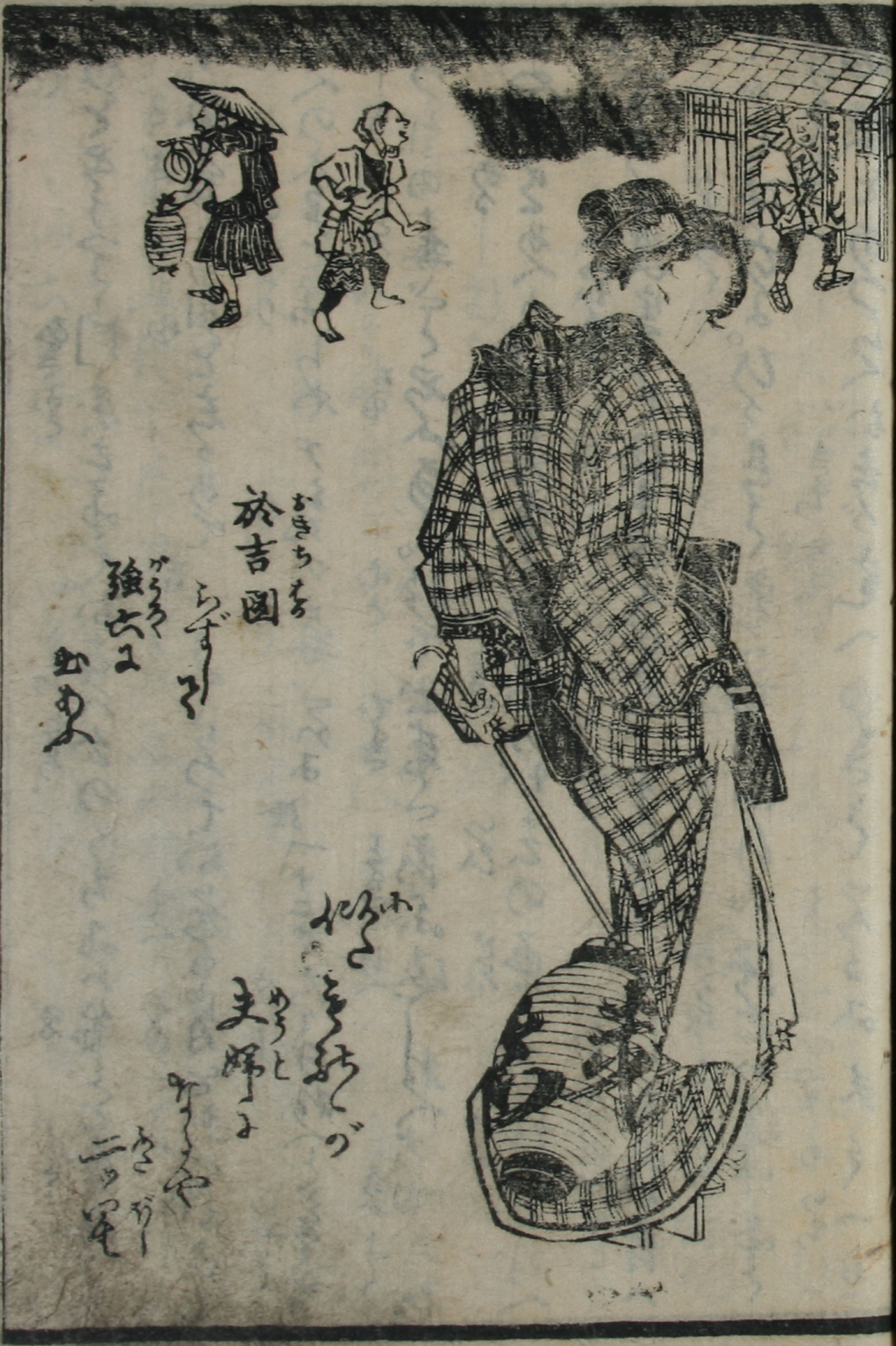
寝(ね)るが。十二金廿へおまへ何時(いつ)でも出来(でき)るから。更(さら)もよし。其(そこ)までより
ら先渡弁(いろうぢやう)も若しまぎれみ出(で)ゝゆを云(いつ)て。お前(めへ)もなんとか
ぶつ〳〵寝(ね)るぶてらうと。起(き)ようきみもなつて寝(ね)る論(ろん)だから。今(こよひ)の
出来(でき)さちそ幸(さいはひ)。今夜(こんや)久(ひさ)しぶりで中丸(なかまる)のふ。要(かど)らうと
名も ぶつてお前(めへ)の宅(うち)へ往(いつ)る所(ところ)ぞア　吉「ナヤ夜精(さう)お云(いひ)じやアお気(き)の
毒(どく)ごねへ。其(そん)ならゆかうと云(いひ)ならへが。何程(どう)も今夜(こんや)は幸一件(いつけん)に
色(いろ)るのくッちやア気(き)が儘(まま)なるから。おまへん宅(うち)へ往(いつ)て待(まつ)て寝(ね)て
おらんなまへへな。私(うち)きやア被おまへ呂しとして帰るから　張「

る麁ア云ねへナ。衣裾に込みさる合が。衣裾ちよろつくる殿いくものうナツそうして。お吉さん未だ床ちやアおまへが不斗癖に浮んで法もねぐうぶちつとしやア噺し合ても面白ねへアナく一圓覚へ付く踏んで甘く習字ふうつくろつて。咄合の出来ねへと云様だやアあるめへし

吉へアイお身ぐるみ。ホンニそれも衣様さけれど。秘しの方みも是非今夜今ぶるくつちやアるくるいてのもあり。何かご

かゝ。そりやアおまへん様逃ぐても行きせて へ王 事く。金流くるく一日や二日へ。己ふ合せ秘といふのサト





於吉（おきち）図らずして強六（がうろく）に出来

[illegible]さ[illegible]紙での夫婦（めうと）によみするや
きがし 二ッ筆

袖（そで）をまくつて入墨（いれずみ）をみせて。お素人（しろうと）衆のうちへ無心（むしん）など強請（ゆすり）あがる

も。故座（こざ）と罰（ばち）を見つめて　吉「それまざつてお爺（ぢい）さん脊（せ）を打つておきやし

らくの金を借（かり）ちやア気（き）の毒（どく）でござる子　源「十二サ大なる人とこなるヨ

めしきつての毒（どく）でござります。元（もと）で出来（でき）た時（とき）節（けん）に違ひない大南（あさ）殿

ぢやアあるめへか　吉「そんならお茶の出（まく）がらの番（どころ）に性（しやう）根の入

源「サア〳〵勘定（けんぢやう）して仕舞（しま）ひねへ」ト手をとつて引（ひ）き起（おこ）しに吉六（きちろく）は

やがて源六（がろく）はぴつと立つて宅（うち）へ帰（かへ）りゆけど源六（がろく）は途中（とちう）から

酒肴（さけさかな）をあつらへお吉（きち）が宅（うち）へゆきて見（そ）るに。私（わ）この内（うち）一あ

蒲団を冠り。大欠を被ぎて臥て居る處を見るにつけ
ても心のうちの。可笑さを堪へながら枕もとへ立寄て
隠「和のさん何様だ。お前さんざめに逢さの。やとく夫でも
怪我アしねへで吉かつさ。昨夜冷さうゝ何様しても。塩
梅が悪りいさうだ。ナニくきつひるみれねへ様子だ。ぞへ
にし
るのに往ねへ　和の「イヤハヤ命拾ひを仕ましたチイく婦
さんが。お前も好往て来さのう。紙屋の挨拶ながらゞく　吉「十二軒
途ゞく源六さんにお目にかゝつての。家へ寄る様ーも星

彼方(あつち)へ〳〵色(いろ)ごとにゆつくこのヨ　客(きやく)「ヲヤ其(それ)じやア色(いろ)男(をとこ)ヲちめへ

他人(ひと)のことゝ思(おも)つて平(へい)気(き)で居(ゐ)るのう　客「ヲヤモウ毋かまし〳〵

お前(めへ)よりやア先(さき)へ生(うま)れて居(ゐ)るから。何(なに)もかも承(しやう)知(ち)だヨ。無(ぶ)様(さま)

てゐるねへ　客「十二人キ。此(こ)ゝ(え)様(やう)な目(め)に逢(あつ)て年(ねん)季(き)を勤(つと)めて居(ゐ)るもの

が。随(ずい)分(ぶん)手(て)の伸(のび)る仲(なか)に後(あと)で見(み)える人(ひと)の。受(うけ)合(あい)がつきやア差(さ)し人(にん)が何(なん)ぞで

其(その)手(て)紙(がみ)をよこしね人。近(ちか)目(め)が色(いろ)て来(く)るから　客「又(また)藤(とう)ア云(いふ)

ね人ナ。ウン〳〵呼(よ)んで居(ゐ)る座(ざ)敷(しき)に。何(ど)所(こ)ぞ人(ひと)来(き)て居(ゐ)るものから此(この)へ云(いふ)

此(こ)の所(ところ)のが出(で)来(き)るなけりやア。分(ぶ)かるといふものがまア　客(きやく)「ヲヤモウよく

つら〱惟(おもんみ)るに忠(ちう)孝(かう)ハいふまでもなく尊(そん)敬(きやう)すべき道(みち)なれど

これしの忠孝(ちうかう)全(まつた)くしぬく者(もの)を(ゆ)捨(すて)て歩(ある)行(き)せしはれへけるやア

ちよ道をも方違(まちがひ)へあるやア仕(し)ねへ。ちよう居(きよ)につけたる薬(くすり)ハねへヨウ

このへつと徒(と)の髭(そくび)が本体(ほんたう)に利(きく)ねへといつて。其(そ)れを口(くち)きゝに(なを)様(やう)く

ける見(み)ん

これろく呉(ご)服(ふく)さんまで三(さん)がな之(この)女(をんな)房(ぼう)ややてから時(とき)まてねへとサア金(かね)

て紙(てがみ)を此(こ)ちら方(よこ)へ越(よこ)しねへ。自己(おいら)が元(もと)を貸(か)すアト旅(たび)へもせぬ踪(め)

をむき出(だ)して。むつくと起(おき)上(あが)りざま後(うしろ)へ押(おし)たをして「コレ

熱(ねつ)心(しん)にするがいろいろ婦(きやう)才(げん)空(くわん)位(ゐ)もえ(ひさ)しいもんだア。自己(おいら)ア

巨細理(こまかいわけ)ハ知らねへが。お前(めへ)の散々(さんざん)に愛(あい)さこのも迷ふ不埒さんが

極悪(ごく)人から請合(うけあひ)人(て)不性といつからも一寸(ちよつと)なるの金(きん)のくさぶぽまのふつけちやア

自己(おのれ)も助太刀(すけだち)を主(しゆう)殺しと思つて。途中(みち)から無理(むり)に連(つれ)て帰つ

とのざア。何(なに)も彼も急(きう)迫(せつぷく)証へねへ。猿(なぎ)も詮(えらう)合ともござから

マアく気(き)を落(おち)付(つけ)て爾(すま)し合(あへ)をするが臣(いゝ)ト家(あざ)ある訳(わけ)ある

流(あら)への。卑怯者(ひきやうもの)を持来(もちき)てまへば。お吉(きちろう)丈とらつく縁(えん)とつける径へ

サアく私(こ)のさん。お前も一口呑(ひとくちのみ)ねへ。疵(きず)へ付(つ)け背(さう)だ友様鍋(よへ)る肝(ろけ)ハ

ね[illegible]けれど[illegible]卑怯(ひきやう)を莫乱(う)をおくさらるおら奮(ちう)も振不思(せう)へるのざア

ちよと坐もろく〳〵仕ねへ騒ぐちやア仕ねへぜト其よりお客衆
さし対坐の二人が懐の中より取出し膝を撫しつゝ見とれ和の
一も酒の功徳おほく。心地の勇みしく見へすやくと聴る
郎「ヤア〳〵此病人もお静まつたさ。トキニお君さん気分はどうだろう
して居る。扨むの懐しと仕わくが手を拭で紙数の表紙と
いふものア鈍物なものだ　青「十二子紙数といふ〳〵もたつへろア
しろまへが。紙治さんから小春へ出す手紙の文が。ホンノに濃
ぶさがる。其までゞけれど。アノ子の三和の一の側に落て能くあるさ

かく。何でもお家業の往来に遠くはへとゞまらぬ会邑にでも
用ひらるゝといふ卦向ごみ見ど。ちかづ先ごろ穀みつる紙のよふに
車と挿つけらく。其く雅がおて繁とおふらるサ 浄「つんくそいつゥ
不実ごの。其紙で紙漉の所へ往のうぱ。まうこ小まうか所へ
往の一私きやアのきまり。天満町へ往つまりサ 浄「ムう
客様サト 旦那「イヤ＼／夫じやアいうねへ。アノ小まうが宅へ往く
あのゝ 彼奴をばまちめがおもい見ごと付てサ。私ふところ引ゝろまへ
使けるところ。十分張面に見えるぱ。何でも紙漉と表個とおれま

どうとりて好人。ア、生気の小さな女ぞかし。雑くして紙漉へ
お勝を仕かけるぞかし。それぞ先の才やまだ[illegible]人へがある
ツても奈良茶人の手繰や風呂[illegible]の釜を蒸て[illegible]
肉汁となる紙をすって。金を産する[illegible]あり紙
ぢ沼の[illegible]く。妻もむきて見るも甘くて宮仕人の耳へ
へろも遠入と状ぞかし。和らぬへけりやや[illegible]るか人と。何た[illegible]
いふきろ[illegible]しく。紙縣まへでも辞さんでも出抗といふぞかし。[illegible]
くえるとも金を[illegible]もかいてく[illegible]すると[illegible]

不孝（ふかう）の者（もの）と知（し）れねへやス　吉「左様（さう）さあれ二左様（さん）ぞえ　徳「其（それ）こそ又親
何（なん）ととふ云（いう）ても親（おや）が方（かた）ぶ知恵（ちゑ）があるゆへ世上（じやう）の算盤（さんばん）八（?）[illegible]
ト云（いひ）ながらお吉（きち）が背中（せなか）をトンと手（て）ぺ（?）[illegible]を押（おさ）へて[illegible]ほと
お吉（きち）めハ（?）[illegible]に情（なさけ）を含（ふく）め　吉「あの世間（せけん）相（?）応（?）の知恵（ちゑ）の有（ある）人（ひと）の
工面（くめん）が悪（わる）かろうの。皇天（くわうてん）さへも忠孝（ちうかう）のごね（?）へ下（くだ）さる
善（よ）う見（み）れバ随（ずい）分（ぶん）へ。写（?）に（?）お吉（きち）が不人情（ふにんじやう）に強（?）面（めん）かりしても（?）
うち息子（むすこ）を　徳「へゑまことに人迷惑（ひとめいわく）な親（?）が治（ぢ）まってさ。不（?）然（しか）らバ（?）ぶらぶら
なおもちつくりござあ。其（そ）の親（きやう）さ今夜（こんや）世界（せかい）の[illegible]入（いる）とゐこう

けが゜の御様しき遊山ごろ　吉へアノ十二滝ハ仕なさへお奥の泉
子デリく入のごろう御振りするへ子　孫へ義手斗ごろう紛娘〳〵
豆ラ゜サ画のか安ろう卜生を握りて゜ガヤラ〳〵いえせる　吉へそん
るう子御華三年ぬぐろく、お僧子゜御法が流くと武家返をとろう
孫へ十二そうやア御詣でもいろト勅定してお吉ハにくせぞ゜お吉や
大神の引出へ入く　吉へモウ寝母るじやアろへられへ゜何ござ今
や　夜ア机をくツてあろきへろう゜ぐ〳〵ぶりでお前さんの温めく、
ゆくひへへ曰　孫へ〳〵お法ウ言子゜チ振するのを言ろうて

駕籠(かご)ふるや仕掛くぜ表(おもて)「十二駕籠(かご)をとゝのへても吟(ぎん)じつゝつても高茶の良世人誂て扇巴へ能ハト翻縁かる古声が加印他目(よそめ)にはうつくしとみえし容貌の月(つき)たちまち振も脱れ乱れさへ束髪(つかね)の。渕に砕(くだ)くるごとく雲露六にとぞ枕ある。べく一睡(いつすい)の。夢にその夜(よ)を明(あか)しらん

第二十回

人(ひと)の親(おや)の心(こゝろ)は闇(やみ)にあらねども。子(こ)を思(おも)ふ道(みち)にまよひぬるかな。と往昔人(むかしびと)の秀吟(しうぎん)。千載(せんざい)不朽(ふきう)の格言(かくげん)なるべし。故(ゆゑ)に

枝猪の鬼猪と異名せらるゝ侠者の吉蔵ハ子分子方も多
くありて。其元の世話もせし。伴右堂島の和泉屋も尓
英介の配り抽由。去の鬼猪の面がまへて。拵りぶ
こゝろひと人つくみ。其身も子も中ゝ心を悩ます夫の
日頃ハ。お潔が苦労する憂つきるさへ心いたいけの。娘が
身をも察しけり。ひたすらと一途の女気に。思ひ心をおして
いと後の先までおもんぱかるも。残りある父子の情。ひとへに信
思案して。白川町くがゝきて。小舟が方へと弱ぐ世して

しかも小春(こはる)は曽根崎(そねざき)。紙治(かみぢ)が利兵衛(りへゑ)の網(あみ)に然(ぜに)ゝ。お浪(なみ)と姉妹(きやうだい)ぶん。ふみおつる紙治(かみぢ)をしたふる季節(そのとき)より。ぶら〳〵や六月の日(ひ)はまど。ども。紙治(かみぢ)の方(かた)より音信(おとづれ)。うけたまはれば事(こと)子角(かく)猶(なほ)も手まつか（つね）らず。泊(とまり)の花婆(ちゞ)がおりしくろ。聞(きき)て手柄(てがら)さん（き）ゑんにかゝ里案(あん)ドるまゝ女(をんな)の癖(くせ)。髪(かみ)さへろく〳〵に上(とりあげ)くさし（さん）所(ところ)へ見えるよしの男(をとこ)小春(こはる)さんは此方(こちら)かと言(いひ)てあがる明(あけ)る障子(しやうじ)の音(おと)。小春(こはる)はふりむき「ヲヤ、おまへさんは何処(どこ)から」男「アイわたしは枕橋(まくらばし)の小米(え〳〵)まで来(き)ましたと。きて伴めて小春(こはる)は兎(と)もかく（これ）。お瀧(たき)が

ゝ方より人（ひと）を待（その）ゝ。まさ硯（すゞり）紙を云（いひ）て紙せしぬ。違（ちが）ひ有らトと枕（まくら）

襖（ふすま）すも。ば口紙新（きせ）さん（いや）旦どぐ。まさろ様でも旦那（おつ）さまば一寸（まち）ア

此方（こなた）へおいで（いで）なさい私きも今日（けふ）は道楽（あんだい）が見へかく。此様（こゝろ）ふしぎく

ね。居ますりは御免（ごめん）なさいまし男「ヲヤそりやアこりや子。ごふも内儀（どうらく）

あゝそりやア先（せん）から。大分（でへぶ）世間（せけん）に。病人（びやうにん）が多く出来て。お大事（ごさい）になさ

せへ。（下キ二）ふ去まん私（てまへ）しやア縁起（えんぎだし）様のお湯（きた）が又の。見様（おそなへ）ぐお

ぜへ出来て。行つきまし（なるほ）不祥（おつ）なまでも云ふに来さうと（ひき）、おゆひゑ

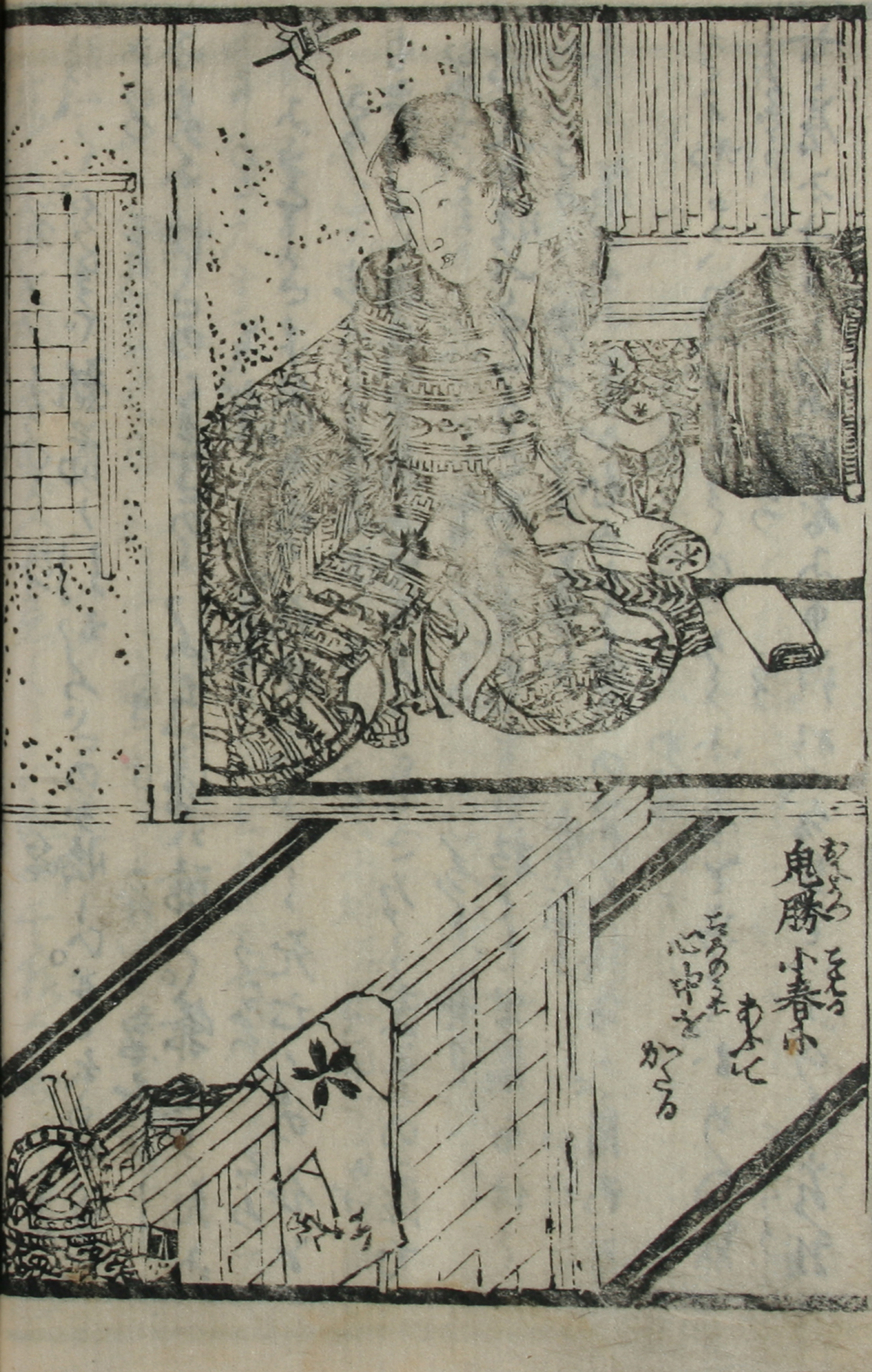
さらよが。今（まづ）て左様（ござり）ならやア（おり）ありやせん。それが（こけ）お茶（まく）紙（うちが）さんに

久(ひさ)しい馴染(なじみ)ゆゑ。顔(かほ)に死(し)を[illegible]きつと執心(しふしん)とも。お浅(あさ)ましいで若(わか)徳兵衛夫婦(ふうふ)にするといふ。約束(やくそく)もあるさかいで。所(ところ)で私(わし)が娘(むすめ)のお[illegible]が。何(どう)様しても[illegible]合(あひ)の紙治(かみぢ)さんと心易(こゝろやす)くなつてアノ人(ひと)も不便(ふびん)がつて呉(くれ)なさるゆゑ。お孫(まご)その[illegible]へおこらじ[illegible]らも[illegible]アこくらちの[illegible]。紙治(かみぢ)さんもまた独身(ひとりみ)でゐるゆゑさせるすがりに。を[illegible]まて夫婦(ふうふ)にもなられるであらうと。私(わし)も[illegible]太兵衛[illegible]張合(はりあひ)するが。[illegible]あるといふ事で。お[illegible]が[illegible]を[illegible]く。[illegible]

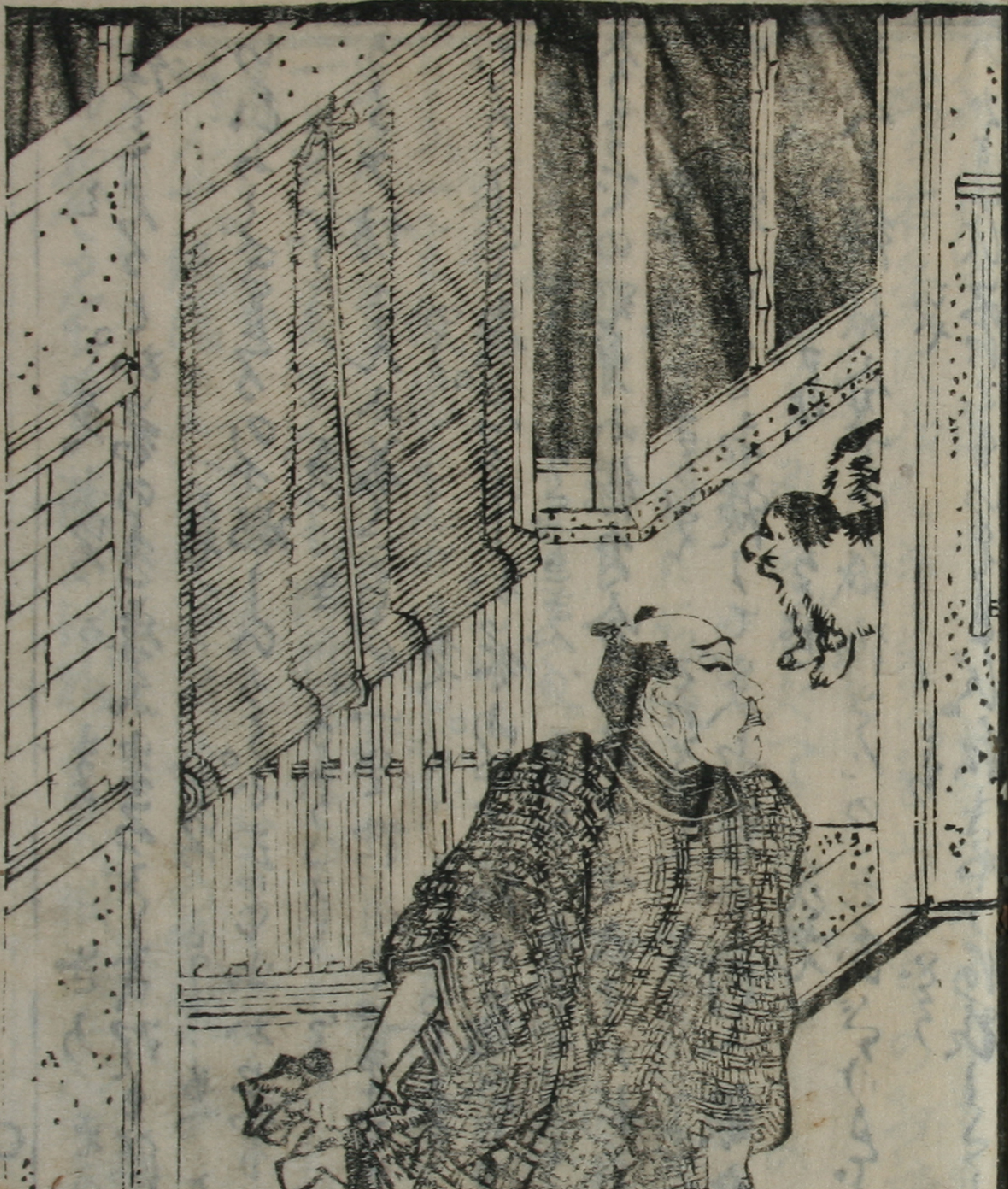
孫も出来たら。扨（さて）あがりかゝしへ。ソウ小蝶（こちよ）さんお袋の顔（かほ）ぶ
此様子を申上候所縁談（ゑんだん）でも。道理（どうり）して一向（いつかう）許（ゆる）さぬ気（き）を揉（もん）で、
ても。縁（ゑん）がなくつちやア祝言（しうげん）するめんどうやアねへと。定（さだ）まつて縁組（ゑんぐみ）し。面
お隠居（いんきよ）がね。それでと見合（みあひ）を仕（し）かけた所が。御遠慮（ごゑんりよ）ばかりして。
おまへお袋と姉妹（きやうだい）がおまへのあつく。お前へ縁付（えんづけ）て世帯（せたい）でもまつて世
ね能（よ）く不残（のこらず）来（き）ても。嫁（よめ）清さんの了簡次第（りやうけんしだい）不承知（ふしようち）でなけりやア
兄弟（きやうだい）が揃（そろ）つて。此内（このうち）清さんとお隣（となり）が。ちやうだらう浪様へ揃つてお前
を呼（よび）寄（よせ）しが。誠（まこと）に日（ひ）の暮（くれ）るまでお茶も焼（こ）ぞ。頃（ころ）待（ま）たされの

とろほすられ人ころしそく。紙治さんと二個で宅へ帰らしやさ
が女といふ奴ア悪る癖があんで家中騒しとくでゑろれ人ちやく紙
ふそ嫁に客のがあごずぽまろろ毎日寒でがんして振るらう私も
ふ紛児のるぞに気ふも敵りく。何程いふ野暮ぎ隠さんと
ふそ咲は世ろうと妻に恋が方衒が去ふやア。彼日のる紙紙治
きんが大当不罷アろそく。秋き不云ふきろふやア。おもへど
まで云合めて承知して振るがう。近ひの人をまうても
来だん。私とかくせまがうて去くしい奴ぎ。手紙は奴ども恋ら

けれ〳〵。今まで麁薄と引かゝりてのが勝し。是こそものゝ業は不義に惚この道このいふ気儀は陰々。亭主が能に隠に生てる手間も有り。何やかやで死たい〳〵の心をも起しゝ。況女房にでも去らく是となりし。当世の流で亭主も能がゝらうと思ひつく。是まで持くと世話も仕らくわ夫に疑ひが。小事が心が手強くの不人情からゝ自己も手の者まい殺へ。是らく見ゝ小事を止く。去めへ類女房にするといふ理屈にも誰も殺へ。夫といふのは本額



鬼勝（おにかつ）小春（こはる）にあふて心中（こゝろのうち）をかたる



し
仕ごとするとお茶の湯屋に書ては義理も済もさこと
いふかくさまるのが嫌しいゝぷふ寺も止お茶も止てゝ。在に
うるア坊さんに成きて。一生独身で暮しすつがさる
ぞうりして縁さし。お茶のみやア行の稽古もしへ限ぶる
今までの独身に縁付金の五十や六十は行状でもする
かろ。弟さんとお残して。夫婦の所へ縁付く是見な
甘へを。手縁合での紙旅さんのこゝろざけれど。アイとも
いたずらは来ひもいふでん。私きやア行の縁しきる迄もらると

夫(それ)から若旦那(かゝへ)に抱て貰ひます。尤(もつとも)此当年(おもつぎちう)のお姑(そえ)ゟ手(てゝ)ぶまひ
さんと兄弟分(きやうだいぶん)にして。何処(どこ)へ縁付(えんづけ)するのだらう。アイと
いろもて云(わ)て着(じら)ぐるみ。宝の何処(どこ)へ縁付(きづき)くれるやら嫁(くれさん)みの（？）
ましだろ。娼女(ゑいこう)といはれまするとも。妾(めかけ)といはれても。其(それ)ぢやア構(かま)ひまい
かう。一生(いつしやう)紙漉(かみすき)さんの傍(そば)で。くらすのが願(ねが)ひでおりますつて。お
一旦(いつたん)小春(てまへ)さんとも。兄弟分(きやうだいぶん)に成(なつ)て其上(そのうへ)で。どのやうによつく
その頼んで。紙漉(かみすき)さんへ云(いつ)て貰(もら)ふのと思(おも)つて。楽(たの)しみにして居(ゐ)る所(ところ)が
改(あらたま)つて見ちやア様子(やうす)仕振(しやう)が違ひ。紙漉(かみすき)さんも直(すぐ)と邪険(さき)な傍しひ

人くげ五ごゝ。不料簡極めて動と家出して月日のみ経ぬ。漸子経て
御しゝ様ま気めんじゝらふ。ヲイまと伴く帰勤して長まさ
ゆへくいめと。哀しゝ身の為まあまねくトせてのどちつと君が
あるとかげへ送りてめそくと涙しながら指曲ての世の気まく
私しが思ふあるや。物の道つゝ撰けるが。涙ぐくぐさぐく
心か
しみじみくて旅ちやア寂しねく。何の由の出縁ふ生までえるが子を
まゐりさうらうて。今日来申しさうらふ。何と小まえん。ゐや味
幸実や嫌ひの。倫理のとらかるがきゝつと正す。つおか為の

了簡わどうぞ心持ある逢ひが甚くも。傾城さんねへのふ

とろ〳〵おちされ き 恵まれ

先日中お談が来て彼是と決まりねへすと云ことさ

ぶろく。全躰そのが殆よそのがつむそりやア浪気さんが経

といふぞ 云語しく。お前も有るの結ござんすもちいかず女とひめ

めのいおお前さんじやアねへ。お談さんじめがござるお物の様が

ござる 御へ〳〵聞たヨ。戯ろし行ぞまゝに了簡がよくの。ち。堂さも

つく 隠しッてるしみえて嘘の世るみせ人。実懐へで紙おもよく〳〵

せん 隠して又ねへけれやアるゝ ねへトいけ長ぎを皆くもふ懐を

不実男(ぶじつをとこ)の或人(あるひと)に威(おど)されて恩(をん)を怨(うら)み敷(しく)なりて。眼涙(めなみだ)
まゝせる心(こゝろ)もありしが果(はて)は酒(さけ)臭(くさ)き息(いき)にて客「其(その)方(はう)が性(しやう)しれ
皆(みな)〻様(さま)でござりまする傾「遠慮(ゑんりよ)にも偽(うそ)いふにも。夫(それ)まで
気(き)を揉(も)んで口(くち)説(と)いて僕(ぼく)〻直(ぢき)に有(あ)るものを客「ヲヤヲヤ皆(みな)
私(わち)きの方(ほう)にやア、恐(おそ)ろしいのなつてゐるの、ばかり。毛はさるお客さん
のゝのに飲(の)ちやア。情(じやう)傾城(けいせい)とお云(いひ)なさることもあるまい
が。それじやア傾城(けいせい)の誠(まこと)ぶつて。私(わちき)も気(き)を揉(も)して何(なん)でも酒(さけ)
有(あり)しだいへ酒(さけ)わく
のゑゝ様(さま)が滝(たき)さんと浴(あ)めて。そこにあまりそのうへ

御贔屓方ありと何ありと。お前の御出の茶屋に仕ませう

お滝さんは何様にも中々ぞろ鈍るのはぞ。待ちきの方におへ

あやア。嫌様の何のと言ふので寄るにも及ばぬ。もうたくさん此上

一室に居ながら。紙へ運て世話をしてあとまわりが

損を待てるのは些も構ひませんと。滝沼さんに挨拶をして来

世上一ぢやもんぢや。それ後ほどろぞり来もせん。何の便りもありやう

待きの方でちそ何様ぢやしらと。おれに咲くの茶屋方して待て

私ますへもの武。やレ嬉に寄つても来ぬのは人ッ所を乱して

のと。誠よ夢と見てご相なるゝ於云て。後をおこ上女治百

がるゝまゝせんれへ。誰ぞゝ声やくら且て。しか程々僕ゝ

を

るゝ於云出し。このかれへ。夫しれの志やうの小宗程ゝ

ひを人よやア竟のが。何程して自転きき字木でも此このかれへ

トいひも絡らじんあ神ふ。良於捨ひくさし侍き人目も

枝ず咲かゝる

志満臺四編巻之上終

落丁

落丁